

園長通信

(令和8年度10月号)

幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園
園長 岡部 祐輝

【次の学習指導要領や幼稚園教育要領等がめざすもの】

教育の世界ではニュースなどで「**学習指導要領の改訂**」や「**新しい時代の学び**」といった言葉が聞かれます。これらは小学校以上だけではなく、幼稚園の「幼稚園教育要領」とも深く結びついています。

「教育要領が変わるって、どういうこと？」、「幼稚園のうちから勉強をさせないといけないの？」と疑問や不安を感じる保護者の方もいらっしゃるかもしれません。今回は、これからの教育がめざすことと、それらが子どもたちの成長や小学校での学びにどうつながっているのかについて、考えたいと思います。

1. なぜ今、教育が変わろうとしているのか？

私たちが生きるこれからの社会は、AI（人工知能）の進化やグローバル化などにより、変化の激しい「予測困難な時代」になってきています。こうした時代を生き抜くためには、単に知識を暗記するだけではなく、「**自ら課題を見つけ、考え、周囲と協働しながら解決していく力**」が求められます。そのため、現在の学習指導要領および幼稚園教育要領では、「生きる力」を総合的に育むことが共通のテーマとなっています。

2. 幼稚園教育で育む「資質・能力の3つの柱」

幼稚園教育要領では、幼児期に育みたい力を次の「3つの柱」に整理しています。

① 知識及び技能の基礎（何を知っているか・何ができるか）

文字や数を知識として暗記するのではなく、遊びや生活の中で「あ、これはこうなっているん

だ！」「こうすればうまくいくんだ」と心と体で体験・発見することです。これが将来の教科の学んでいく基礎となります。

② 思考力、判断力、表現力等の基礎（知っていること・できることをどう使うか）

身近な環境に自分から関わり、「どうすれば面白いかな？」「こうしてみたらどうだろう？」と試行錯誤したり、自分の感じたことや考えたことを友達に伝え合ったりする力です。

③ 学びに向かう力、人間性等（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）

近年、教育の世界で注目されている「非認知能力（自己肯定感、粘り強さ、自制心、協調性など/社会情動的スキル・実行機能などの言葉で説明されるケースもあります）」がこれにつながります。

3. 小学校へつなぐ目標「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」

幼稚園での学びを小学校にもつながっていく視点（方向目標）として、幼児期の終わりまでに育ってほしい具体的な姿を「10の姿」として示しています。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）】

- 健康な心と体（自ら体を動かし、見通しを持って生活する）
- 自立心（自分のやるべきことに気づき、諦めずにやり遂げる）
- 協同性（友達と同じ目標に向かって、協力して取り組む）
- 道徳性・規範意識の芽生え（自分の行動を振り返り、相手の立場やルールを理解する）
- 社会生活との関わり（地域や身近な社会に親しみを持って関わる）
- 思考力の芽生え（「なぜだろう」と考え、予想して試してみる）
- 自然との関わり・生命尊重（自然の変化を感じ取り、生き物の命を大切にする）
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚（生活の中で数や文字の面白さに気づく）
- 言葉による伝え合い（言葉を通して気持ちを伝え合い、人の話に耳を傾ける）
- 豊かな感性と表現（心を動かされたことを自分なりの方法で自由に表現する）

これらは、単一の活動や、How to（いわゆる●●指導）だけで身につくものではありません。根幹は、**「遊びと生活」**、**「人と人との相互関係」** などの中ではぐくまれるため、受け身の授業や保育では育っていかないとされています。

4. なぜ「遊び」が学びになるのか？（環境を通して行う教育）

幼稚園教育の根幹は「環境を通して行う教育」です。子どもにとって「遊び」こそが最も主体的な学びの場です。例えば、以下のような遊びがありましたが、この中で「試行錯誤」、「仮説を持ち試す」、「関係性の中で協同・協働していく」などのことが見られます。（5歳児事例）



①車輪がついているものを試し結果に関心を向けている。



②先ほどの結果をふまえ、複数素材を活かし、「比較」・「競争」へ。どちらかが速く転がり落ちるだろうか。



③新たな素材でも試し、これまでの中で一番速いものVS新しい素材の対決を展開。



④結果を踏まえ次の面白さを展開している。(円盤のような積み木も速いのではないかという仮説)



⑤面白いかも？速いかも？という仮説を検証する遊びへ。



⑥一人の子どもが見つけた遊びの面白さが、友達に広がり、面白さを共有。新しいアイデアや考えが取り入れられる可能性が高まった。(協同・協働へ)



⑦「板をここに置いたら面白く（速く）ない？」：こうしたら面白いかものアイデアが複数の子どもたちの中で広がり、遊びが広がったり深まったりしていく。

このように、遊びの中の環境が豊かであること、自分で選択したり決定したりする環境があることで、どんどん遊びが進化・深化していきます。そのためには立ち止まって考える時間が幼稚園だけではなく、小学校以降の教育でも大変重要となります。その立ち止まる時間があるからこそ、「**問い（なぜ）が生まれる**」ことにつながり、それらが「探究していく」ということにつながります。そのためには、しっかりと環境や現象、事象に向き合う時間的な余白が必要となります。しかし今の時代は、ファスト（速く・効率的になど）であることへの価値が高まっている結果、スローに進めることへの注目が薄くなっている現状もあります。幼児教育ではこの「**時間的余白**」をしっかりと取るために、いわゆる「**レッスン**」、「**メニュー**」、「**プログラム**」といった**大人主導の教え込みの教育ではない**ことが大切になってきます。（詳しく知りたいという方は「スローペタゴジー」という考え方をご覧ください）

5. 小学校の「主体的な学び（アクティブ・ラーニング）」への架け橋

小学校の学習指導要領では、「**主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）**」の視点からの授業改善が進められています。幼稚園で「もっと知りたい！」「友達と力を合わせたらできた！」という体験を重ねてきた子どもは、小学校に入ってから、自ら問いを持って授業に臨み、友達と意見を交わしながら考えたり、疑問を解決して納得したりするという「**学びのサイクル**」を自然と回すことができます。

現在では、幼稚園から小学校への移行期（年長～小学1年生）を「**接続期（架け橋期）**」と呼び、園と小学校が連携して子どもの育ちを支える取り組みを進めようと国や行政が中心にしています。

6. 次の改訂に向けての中心的な考え方

今、国で議論されている中で、以下のような言葉やフレーズが出てきています。

●主体的・対話的で**深い学び**の実装

●多様性の包摂

●実現可能性の確保

~~~~~

●自らの人生を舵取りする力

●民主的で持続可能な社会の創り手

●「好き」を育み「得意」を伸ばす

●当事者意識を持って自分の意見を形成し、対話と合意ができる

上記の言葉が次の改訂の中心的な考え方となっていくといわれています。

これらは決して子どもだけに必要なことではなく、わたしたち大人にとっても大切なことと考えます。子どもたちが「**自分事と考え、自分で工夫したり乗り越えようとしたりする意欲を持ち、前に進めよう**」とするためには、与えられた意味や意図をわかっていない課題をただこなす保育では、いけないと考えています。

J・デューイという教育哲学者は、

「もし私たちが生徒に昨日と同じように今日も教えるならば、私たちは子供達の未来を奪っているのです。」

という言葉を残しています。 私たちは保育の専門家として、常に変化する教育・保育のうねりをキャッチアップしていくことを続けていきたいと考えます。

さて、10月には運動会参観（3歳児）や運動会（4・5歳児）があります。子どもたちが日々の活動の中で、考えたり、工夫したりしてきたプロセスとともに、ぜひ当日の姿をご覧くださいできれば幸いです。